

本号で、『社会福祉』は第50号となります。そこで、「創刊に寄せて」
という生江先生の手稿と、創刊号から現在までの目次を掲載いたします。

社会福祉第1集 創刊のことば

社会福祉学科科長 菅 支那子

本学、社会福祉学科においては、此度、科誌「社会福祉」を発刊することになった。

これは戦後特に重要視されて来た新しい学問である社会福祉学についての研究発表の機関として、広く同学研究者の方々のために提供するものである。また我が国における社会福祉学、特に女性の側面よりそれが促進に資そうとするものである。同学に志す方々の御奨励、御鞭撻を願ってやまない。

なお同時にこれを卒業生・在校生の連絡、親交の機関とも致したく、久しく待望されていた科誌の創刊を契機として、卒業生先輩の皆様の御支援御協力を心より御願ひする次第である。

社会福祉 第1集目次

創刊に寄せて

社会事業講座担当二五年間の思い出	生江孝之（口述）	1
☆卒業生の動向と就職状況		6
現代日本の児童福祉問題	松島正儀	7
精神衛生運動の方向とその準備について	井村恒郎	18
☆松本武子先生のアメリカ便り		23
子供の宗教教育	菅支那子	24

卒業論文

特殊地区における家族軌跡と児童に対する影響	新生三回生 金谷昌子・鈴木百合子	29
☆一九五三年度卒業論文題目		37

訪問記

社会福祉を学ぶ学生に何を望むか

..しっかりした基礎を身につけよ	労働省婦人労働課長 谷野せつ	38
..社会事象に対する科学的分析力を	日本社会事業短期大学助教授 五味百合子	40
☆アンケート「その職場にお就きになった動機は」等		42

調査研究

主婦とマス・コミュニケーション主として新聞ラジオの調査報告 -	高月東一	45
離村年少労働者の非行行為の契機に関する調査	前田 栄・一番ヶ瀬康子・田宮良子・吉沢英子・平松美代子	73
養護施設職員（保母）の生活と人となり - ホスピタリズム其の一 -	前田 栄・吉沢英子	86

社会事業家伝

石井亮一氏	一番ヶ瀬康子・平松美代子 96
☆資料紹介・東南アジアにおける各国の社会福祉に関して	105
☆良書紹介・「少年非行の解明」「社会調査」「ジェーン・アダムスの生涯」	107
☆科の動き・わかば子供会について・めじろ祭の記録	109
☆新制一、二、三回生の消息	113

カット 高村秀也

創刊に寄せて ―社会事業講座担当二十五年間の思い出―

生 江 孝 之 (口述)

私が、日本女子大学に新設された社会事業講座の講師として、その交渉にあずかり、お受けしたのは大正七年で、その当時は、成瀬先生も御存命中であったが、しかし、その問題で直接お会いしたのは、当時の学監麻生先生であったことは言うまでもない。私は、その講座を担当すべく御交渉に接した際には、身辺頗る多忙、かつ、それまで学校の講義を担当した経験がなかったので、任務の重大なるを痛感し、一時躊躇したが、熟慮の上、遂にお引き受けしたのである。爾来昭和十九年に至るまで、満二十五年、学校の門をくぐったのであるが、年齢からいえば五十才から七十五才にまで達するので、その間における思い出は、甚だ多いのである。

大正七年という年は、わが国の社会問題が、書斎より出でて街頭に進出した年であり、またそれが一時に爆発した年でもあったのである。第一次世界大戦がこの年を以て終りを告げたが、日本は連合国側であったのと、戦乱の中心からは頗る遠い有利な地位にあったので、軍隊の派遣よりも寧ろ、多くの船舶は勿論、多量の軍需品を高価で提供し得たのであった。これがため、一方いわゆる成金族が続出して、富の分配が著しく不均衡になり、他方物価が暴騰して、遂に米騒動の勃発を見るに至った。この米騒動は、最初富山の一小漁村に起ったのであるが、あたかも大河の一時に決壊するが如く、瞬く間に我が大、中都市に波及し、その勢い極めて猛烈を極め、一時は警察力を以てしては最早如何ともなし難く、遂にやむなく、軍隊の出動を見るに至った程であった。

かかる状態に対し、政府や公共団体は勿論、富豪や成金に至るまで、非常な驚きと恐怖に襲われ、これが善後策として物価の低下をはかるため、全国主要都市に簡易市場、簡易食堂を普及せしむる等の、一時的処置をとったが、これが契機として恒久的な施設の増設拡充に全力を尽すに至り、従来の慈善事業を踏み越えて社会事業へと進展するに至ったのである。しかしその際最大の難事は、「この新しい政策に基づく新しい施設の指導者の缺乏を如何にして充実し得るか」ということであった。

それで私立大学、高専等においては、その必要に応ずべく、これが養成機関を設けようとしたが、容易ではなかった。その中率先その必要を充たすべく、決然として「社会事業講座」を新設したのは、ようやく日本女子大学、日本大学及びその他二、三校のみであったと記憶している。

私は大正七年、日本女子大学、日本大学の双方において講義を担当した。女子大においては、選択科目とし、各学部からの希望者を以て組織したのであるが、学生数は四、五十人に達した。しかし、その状態だけでは、客観的情勢に適応し得ないことを認めた女子大は、遂に大正十年「社会事業学部」を新設するに至ったのである。それは、児童保全と女工保全に重きを置いたのであるが、その基礎学として、多くの学科も含まれていたことは言うまでもない。その時の教授陣は、「松本亦太郎、塩沢正貞、高橋誠一郎、永井潜、綿貫哲雄、戸田貞三、永井亨」等の諸氏であり、いずれもそれぞれの学界における「権威」であった。これらの教授を以て組織されたという事は、当時の女子大の社会的信用が如何に偉大であったかを明示するものといえるのである。私もまた引きつづき、その末席を汚したが、児童保全、女工保全、および社会事業概論等で一週六時間であった。

私は、明治四十二年以来内務省地方局の嘱託となり、外遊2回における欧米社会事業の調査に基づき、自らその乏しきを知りつつも、我が国における社会事業の啓蒙及び指導に、微力の限りを尽すべく多忙を極めていた。

私が、かかる間において、日本女子大学の講座を担当したのであるが、最初の数年間は、当時社会事業に関する著書およびその他の資料蒐集に困難であったため、主として私の蒐集した資料に基づく、口述の講義のみであった。しかし、それでは自他共に、極めて不便なので、私の資料に基づき「社会事業綱要」を刊行した。

この本は、他の学究的学者のその如く、理論も哲学もない単に平面的な記述に過ぎなかったものであるが、それには次の二つの理由がある。一つは、当時「社会事業」は、日本においては勿論外国においても、未だ「学」とする程の内容がなく、時代の必要に応じ進展するに過ぎず、従って専攻的な学者も非常に乏しかったので、私の小著もまた、その域を出なかったのである。もう一つの理由は、今日でもなお、これを告白するに躊躇するのであるが、私には生来の痼疾があった。それは「頭痛持ち」であったのである。これは、生れて間もなく、後頭部に傷害をうけた結果であるが、これが生涯「私の茨の道」としてつきまとい、それがために、私は「自分の思索力」を活用し得ず、従ってまた、生涯書斎の人となり得なかったのである。

しかし、小著刊行当時において、私は既に外遊数回に及び、欧米と日本内部の社会事業の概況を実際に踏査していたため、著書の八割は幸いにも自分で実際に踏査したものだという「特色」を持ち得たのである。兎に角、社会事業に関する著書の極めて乏しき際、不完全ながら「社会事業綱要」を著作する事が出来たのは、私が女子大で「社会事業講座」を担当した結果、その必要に迫られたためであった。この事は、私が日本女子大学に対し、特に感謝せざるを得ないのである。

私はこの著書を使って講義をしたので、講義が単調に流れたと思うて、誠に申し訳なく思うが、時として教壇の上で、落涙禁じ難く、いわゆる声涙並び下りつつ講義をしたのは、自分の調査資料を通じての講義であったため、その調査当時の感情が心底からこみあげて、さんとしておさえる術を知らなかった故である。これが私の講義の際における特色の一つであったのであろう。

また、私は時々、講義中に仮眠状態に陥り、しばしば学生を騒がしたが、それは「頭痛持ち」のため、時としては多量の服薬を余儀なくされたので起ったのであった。これがまた他に類を見ざる特異性であったと思うのである。そしてこの痼疾は、今なお依然として私を悩ましつづけるのである。

私が、教鞭をとった長い年月の間には、数々の思い出がある。その一つは、日頃は遺憾ながら学生に多く接触する機会がなかったが、しかし卒論、就職の際には、幾度も親しく相語るを得た。それで私はこれらの学生方を今なお記憶しているが、その他は主として社会事業に従事している方々のみである。なお、卒論に対して一言したいのは、私自身が非常に啓発され示唆を受ける事が多かったことである。私は、前述の講座のみを担当していたのであったが、学生は他の専門教授からの講義を織り込んで卒論を書くために、素晴らしいものを書き得たのだと思う。女子大の学生程、卒論に力を尽す学生は他に多くの例を見ないと思われ、深い感銘にうたれることが多かった。

しかし先生と学生との間には、より多く語りあう機会を得なかった事を、今なお遺憾に堪えぬ思いがする。また、軽井沢の夏期修養会において、私は毎夏一週間は平素の生活を離れ大自然に接しつつ、学生と語り歓楽を共にする機会を与えられたが、その折の人格的交流が今もなお、感慨極めて深く、禁じ難い思い出の一つとして、胸底深く秘められている。

更にまた、謝恩会の事であるが、これは学部だけのものと学校全体のものがあった。卒業生がいずれも喜々として、感謝にみちた面持でそれぞれの役を演ずるのであるが、先生方もそれに対し、将来を祝するための感話を述べるのであった。この謝恩会の折には、綿貫氏と私とが、社会事業学部の教授の中で感話を陳べる習慣があったが、かかる際における卒業生達の歓呼と哄笑との連結が、極めて印象深い思い出の一つである。

また、私が地方出張の際、各地で直接社会福祉事業に従事しつつある幾人かの卒業生に面会し、またそれらの人々と一堂に会して往時を追想しつつ談笑する折などもまた、最も楽しい思い出の一つである。殊に台湾、満州及び中国に出張せる際の如き、私のためにわざわざ歓迎会を催し、社会事業学部の卒業生をもその中に加えて、共に喜んで心行くまで語り合う事の如き、香ぐわしき記憶であり、そしてこれは桜楓会員の厚意に依るものであるが、高き教養を受けた桜楓会の会員達が、いずれもその地方の文化昂揚に大きな貢献をなしつつあるに想いを致せば、桜楓会の強靱な結束力と真剣な努力に対しては、深く敬意を表せざるを得ない。

私が職を日本女子大学に奉ずる二十有余年、往時を追想して、感極めて深い。老来視力の減退と共に、日に老境の身に迫りつつあるを覚ゆる。従って自ら筆を執って思うが儘に感想を綴る事が至難なので、やむなく断片的ながら、重複をも省みず思い出の一端を述べたに過ぎぬ。しかし連綿として尽きぬ往年の思い出は、八十七才の老翁を若返らせる大きな潜在力であるを思うて、歓喜と感謝の念わいて禁じ難きものがある。

最後に一言したいのは、「社会福祉学科」に関する問題である。日本女子大学は社会事業学部や現在の社会福祉学科を通じ、我が国斯業の進展に対し、先駆的にまた開発的に大きな役割を演じて来た事は周知の事実と認め得る。しかし千古未曾有の社会的大変革に直面した終戦後の我が国は、その再建途上において大小幾多の諸問題が勃発したが、就中（ママ）、社会問題、社会政策、社会事業等が新しい陣容を整え、社会的に重要な位置を占むるに至った。政治家や学者やまた一般社会大衆においても、競うて社会保障制度の整備拡充に対し、鋭意敢闘しつつあるの如き、その一証左となすべきである。従って、これらの社会的趨勢に対応すべく終戦後、東京、大阪及び中京（名古屋）地方に社会事業短期大学を新設

し、更に新旧諸大学においては、あるいは社会学部を設けまた旧設の社会事業学部を拡充して、時代の要請に応ずべく一意邁進するの跡歴然たるを認め得るのである。かかる際において、日本女子大学においては従来の先駆的開発的の伝統的精神を基盤とし、社会福祉学科の組織を変革しその内容を拡充し、これ等の諸大学と相提携し協力し、我が国文化国家建設の一翼としてその使命を達成のため、一段の検討を要すべきではなからうか。老人は過去を語るの常軌を越脱し老婆心と知りつつも、一言これに及んだ老生の微衷御寛恕を得ば、幸甚の至りに堪えぬ次第である。

編集後記

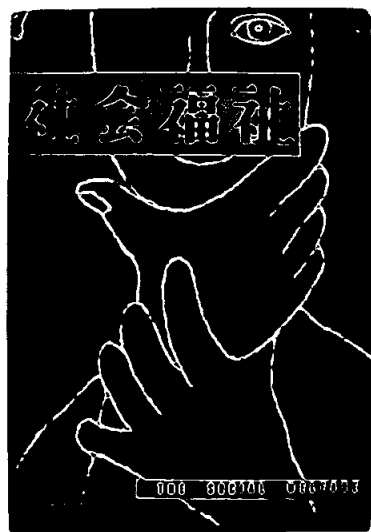
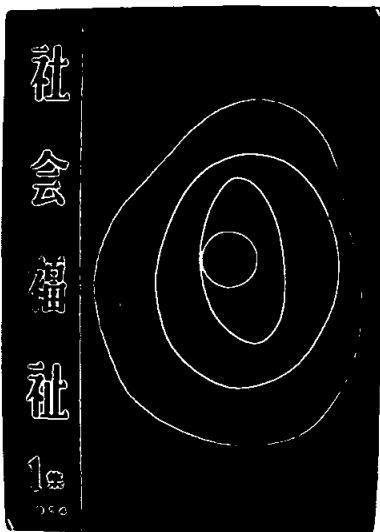
◎科の機関誌が欲しいという事は、随分前から、卒業生や学生の間で云われておりました。「よその大学の社会福祉学科は機関誌を持っているのに。」とか「卒業して家庭にはいっても、どうにかして勉強して行きたいし、学校の事を知りたい。」というそれぞれの声におされて、とうとうこの機関誌を作りあげたのです。

◎まず、誰にでも読んでもらえる機関誌を、しかし、研究的な機関誌をとというのが、この機関誌を作る時の目標でした。

◎社会事業学部。三類時代の大先輩。家庭の主婦で一家をきり廻していらっしゃる方。また、職場でその敏腕をぞんぶんに振っていらっしゃる方。管理科や社会福祉学科の若い、そしてまだ学生気分のさめていない人々。それに学生。皆がこの機関誌を通じ、社会福祉学を通じて「真理と愛」の理想で一体となる事を、夢みてこの機関誌を作りました。

◎創刊ですから、もちろん不完全ですし、内容もまだまだです。でも、御自分の物として、育てて行って下さい。

◎二号への御投稿—論文でも、生活記録でも何でも—を、皆様より、御送り戴きます事を心からお待ちしております。



第5号

私たちの科の、育ての親でいらっしゃった生江先生が、昨年の七月におなくなりになりました。先生の輝かしい御生涯、ろうろうとした御講義の中から、私達は、それぞれいろいろなものを学びました。ここに、先生についての思い出を記し、つつしんで、哀悼の念を捧げたいと思います。

生江先生を偲んで

社会福祉学科助教授 松 本 武 子

毎年、生江先生は謝恩会に出席して下さい、必ずあの朗々たる御声で御話をして下さいました。ニコニコと何の邪気もなく私共を笑わせて話して下さいた先生の御顔を、その当時の方は思い出して下さいと思います。

何回生の時でしたか、「人、友のために命を捧げる、これほど貴きものなし」というテーマで語って下さったときの先生を特に私は思い出します。そして、先生は真底、これに徹していらっしゃったのだと思うのです。

火曜日というと、高橋誠一郎先生、佐藤寛二先生、綿貫哲雄先生、そして生江先生の御講義が前後して丁度重なっていました。午後三時の休み時間には、よく火鉢を囲んで研究室で先生方の話の花が咲きました。先生方もお互いに楽しそうににぎやかに話し合っていたり、そしてこの先生方のお話をきく私共——故柴木、三浦先生と私——も楽しゅうございました。「私は学者ではない」と標ぼうされながら生江先生は、他の先生方と大声で四方山話を語り合われていた様子が目に浮びます。

アメリカから帰国して旬日、私は久しぶりにお目もじして御挨拶いたしました。よろこんで下さって、共々、当学科の昔話を語り合い、今日の発展を先生とよろこび合ったひとときも私には忘れ得ない日の思い出の一つとなりました。

御病気になられてから御見舞に行った時も卒業生の出世話になり、谷野さん、大平さん、といろいろ御発展の様子を申上げると、既に知っていられるのですが、名前をあげてゆくことその事が、先生にはお楽しいのでした。私は、実は孫がおぢいさまを楽しませる様な気持で語り合いました。——しっかりやってくれ、とそのときも、あのときも仰せられた先生の御声を私は皆様にお伝えしたく思います。

社会福祉学科専任講師 一番ヶ瀬 康子

先生の最後の授業が特に印象的だった。それは、先生が、阿片中毒者問題で中国におたちになるため、学校をおやめになる直前の授業（昭和一九年三月）だった。先生は、「日本人が阿片の密輸入をやっている。そのため、中毒者がどんどんふえてきた。私は、この日本人の罪をどうしてもつぐなわなければならない。」と、強くおっしゃりながら、涙を幾筋も幾筋も流された。私はこの時の感動を今でも忘れない。

研究室へ戻ってきて、私は機関誌の編集の仕事を受持つ事になり、そのため、機関誌創刊号の巻頭に、

先生の原稿をお願いすべく、七年ぶりにお目にかかった。先生は、御自宅で、静かに余生を送っておられた。身体が思うにまかせぬから、口述を速記するようとおっしゃって、私は三度、先生の下へ伺った。昔と変らぬ、ろうろうとしたお声で、幾度か涙とともにお語りになったのが、この機関誌創刊号の「社会事業講座担当二十五年間の思い出」という稿である。

この三度の訪問中に、先生は、私の個人的な問題をいろいろとお聞きになった。特に私が、社会事業史に興味をもっている旨おこたえした時の、先生のお喜びの御様子は、私を胸一ぱいにさせた。先生は、自分も歴史に興味をもっていたとおっしゃりながら、御自分がお書きになった歴史に関する著作の事や、論文の事をいろいろお話になった。そして、日本女子大の社会事業学部が、いかに日本の社会事業史上に意義ある存在であったかを、くり返しくり返しのべられ、必ず最後に成瀬が生きていたら、今のようじゃないと、おむすびになった。

その後、三年間、先生のもとへ伺おう伺おうと思いつつ、つい忙しさにまぎれて、御無沙汰していたが、先生から毎年御年賀をいただき、その度に、何時も激励のお言葉が一言必ずかかれてあった。また、先生は、私が書いた機関誌三号の「成瀬仁蔵氏の社会事業観」をお読みになって、二、三の人に「このような研究をしてくれる人がいてうれしい」とおっしゃったと伝えきいている。

いろいろな意味で、今の私は、まだまだ先生の不肖の弟子である。しかし、精一ぱいに、先生が望んでいらしかったものを受けとめて、生き抜きたいと思っている。